

# 小学校国語「やまなし」の授業における 児童の学習意欲を高める授業づくりの工夫

－自己決定理論を手掛かりに－

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 平賀 優志

## 1. 問題の所在及び目的

### 1-1. 問題の所在

近年、児童の学習意欲の向上が求められている。「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(中央教育審議会 2021)では、「目指すべき「令和の日本型学校教育」の姿を「主体的・対話的で深い学びの実現」や、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」としており、実現のために、義務教育段階においては、「意欲を高めやりたいことを深められる学びが提供」されることが求められている。特に、「学び」を「提供」するのは授業者側であるため、児童が意欲を持つことができるような授業の工夫を授業者が行うことは、意欲を高める学びの提供にあたって重要であろう。

また、昨今、「主体的な学び」の実現は「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(中央教育審議会 2021)などで求められてきたが、その評価観点である「主体的に学習に取り組む態度」として、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(中央教育審議会 2016)では、「学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・判断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価」(中央教育審議会 2016)する必要があるとしている。学習に対する意思が重要視されていることが考えられるが、「児童生徒を学習に方向づける力」を自己調整学習研究会(2016)は、「動機づけ」としており、児童が学習に対して向かう意思と、児童を学習に対して向かわせる役割を担う動機づけは密接な関係があると捉えられる。そのため、児童の動機づけを促すことが児童の主体的な学習に好ましい影響を及ぼすことが考えられる。また、自己調整学習研究会(2016)は「学習意欲」を「動機づけ」と呼ぶとしており、学習意欲と動機づけは密接な関係があることがうかがえる。また、学習に対する自己調整という観点から、自己調整学習が手段として考えられるが、岡田(2022)は、自己調整学習は「メタ認知や動機づけ、学習方略など、学業成績に関わるさまざまな変数を含み」、「自律的な学習者像」を育む「学習のあり方として、自己調整学習を1つの目標として設定しているといえる」としており、自律的な学習者を育むための自己調整学習の要素として、「動機づけ」は大きな役割を担っていると捉えられるだろう。

しかし、令和4年度に実施された、小学校学習指導要領実施状況調査の質問紙調査にて、「国語の学習が好きだ」という質問に対して、「そう思う」と回答した児童は第4学年で29.1%、第6学年で18.2%となっており、第4学年、第6学年の調査データが閲覧可能な、他の教科である社会、算数、理科、英語(外国語活動含む)と比較したところ、第4学年も第6学年も国語科の割合が最低値であった。単純比較が難しいものの、音楽、図画工作、家庭、体育(運動領域、保健領域)と比較した場合も、「そう思う」の割合が最低値であった。「そう思う」の割合がどの科目と比較しても最低値であると考えられるのは、単純比較が不可能なため難しいが、他教科と比較して、国語の学習が好きだという児童が少ないことは考えられるだろう。令和7年度に実施された全国学力・学習状況調査の児童質問調査、全国一児童(国・公・私立)においても、「国語の勉強は好きですか」という質問に、「当てはまる」と答えたのは24.3%であった。どの数値も3割を下回り、低い数値と捉えられ、国語科に対する動機づけ、特に好きという感情と密接に関係する内発的動機づけが低い傾向にあると考えられる。よって、児童の動機づけが促されて

いないことが懸念され、さらに、学習意欲も他教科と比較して低いことが懸念されるだろう。

## 1-2. 目的

本研究は、国語科の授業における児童の学習意欲向上を国語科の授業における動機づけの向上と定義し、国語科の授業における動機づけ向上を主眼とし、自己決定理論の見地から、授業者が児童の動機づけを促すために行うことができる授業の工夫を、研究授業の実施によって明らかにし、そこから有効だと示唆される授業の工夫を提案することを目的とする。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 研究授業について

#### 2-1-1. 研究授業実施時期

研究授業の実施時期は、2025年の10月22日から10月24日、10月27日から10月31日までの計8日間、総授業時数8時間で実施した。授業者は本授業実施約半年前の5月から、教育実習生として、夏休みを除き、週一回、対象校の対象学年に通い、学習支援や休み時間、給食中などに関わりを持った。

#### 2-1-2. 研究授業実施対象

山梨県内の公立小学校である。第6学年の1クラス、計28名を対象に授業を行った。本来、クラスは全31名であった。しかし、日本語教室等で国語の時間に取り出しにて授業を受ける児童が複数名在籍していたため、実際の授業を受ける人数は28名となった。

#### 2-1-3. 研究授業内容

光村教科書6年生国語科教材「やまなし」を用いて研究授業を実施した。本単元の単元名は「自分の選んだ読みの観点に基づいて、「やまなし」の読みを深めよう」と設定した。本研究では後述する分析の視点である自己決定理論を手掛かりとし、児童の動機づけを促すことを目標とした授業の工夫を取り入れ、全8時間の授業を行った。表1には、研究授業において特に意識した授業の工夫を、自律性支援・有能感支援・関係性支援の三つの視点から整理して示している。また、表2には、全8時間の授業の概略を時系列で示した。自己決定理論では、自律性・有能感・関係性という三つの基礎的心理的欲求が満たされることで動機づけが促進されるとされている。本研究では、それぞれの欲求を満たす授業の工夫を、自律性支援・有能感支援・関係性支援として整理し、研究授業の中で実践した。

表1 特に意識した授業の工夫

自律性支援	有能感支援	関係性支援
<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きなコースを選ぶために、それぞれのコースを知る時間を設ける。(第2次)</li> <li>自分の好きなコースを選んで学習を進める時間を設ける。(第3次)</li> <li>自分の好きなスライドやまとめ方を選んだり、考えたりして、自分なりにスライドにまとめる時間を設ける。(第4次)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>児童の成果や付随する成果物を認める声掛けを行う。(全時)</li> <li>やまなしMAPを使って、学習の見通しを持つ時間を設ける。(全時)</li> <li>やまなしMAPを使って、振り返りを行う時間を設ける。(全時)</li> <li>授業ごとにめあてを設ける(全時)</li> <li>自分の好きなコースを選んで学習を進める際に、参考にできる学習物を使用するよう促す。(第3次)</li> <li>まとめるスライドにテンプレートを作成しておく。(第4次)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>やまなし探検隊になる。(第1時)</li> <li>それぞれのコースを知る時間や、コース別学習のとき、スライドにまとめるときなどに、隣の人や近くの人と交流する時間を設け、促す。(第2次・第3次・第4次)</li> <li>それぞれのコースを知る時間のときに、全体でみんなの考えを確認する時間を設ける。(第2次)</li> <li>授業者と交流をもつ機会を積極的に設ける。(全時間)</li> </ul>

※やまなしMAPとは、児童の次時以降の学習、本時の概要、自身の振り返りを記述するために授業者が作成したワークシートである。

表2 全8時の概略

回数	時数	内容
第一次 初読段階	一時	○ねらい ・おおまかな学習活動 ○「やまなし」を読んで感想を交流し、全体のイメージをつかむことができる。 ・感じたこと、考えたこと、不思議に思ったことを記述する。 ・次時以降の見通しを持つ。
第二次 コース別 学習 確認時間	二時	○文学ことばである比喩やオノマトペに気づき、表現や文章のイメージを持つことができる。 ・やまなしに線を引きながら通読する。 ・代表で挙げた文学ことばのイメージを持つ。
	三時	○「五月」と「十二月」の文章の比較を通じて、谷川の様子を想像したり、その変化の理由を考えたりすることができる。 ・水や光の様子が分かる言葉と、そこから想像した谷川の様子、変化の理由を確認、共有する。
	四時	○「イーハトーヴの夢」から宮沢賢治の生き方や考え方を知り、それらがどのように「やまなし」にあらわれているのかを考えることができる。 ・小学校6年生の範囲の言動等や、やまなしとの関わりを考え、確認、共有を行う。
第三次 コース別 学習	五時 六時	○「やまなし」を自ら読み深め、学んだ方法を基に、選んだコースを探検しよう。 ・「やまなし」から文学ことばを見つけて、言葉や文章のイメージを考える。 ・五月と十二月の水や光、かに、落ちてきたものを比べて、変化の理由を考える。 ・中学生以降の宮沢賢治の生き方や考え方と「やまなし」との関わりを考える。
第四次 Google スライド まとめ	七時 八時	○「やまなし」を読んで理解したことや文章に基づいて、「やまなし」の素晴らしさをまとめよう。 ・Google スライドの使用の確認をする。 ・コース別に学んできたことをそれぞれのスライドにまとめる。 ・まとめ作業が終わった児童から他の児童のスライドを確認し、意見を収集する。

## 2-2. 分析の視点と手続き

### 2-2-1. 分析の視点

分析においては、自己決定理論に基づく「自律性、有能感、関係性」の3要素を用いた。

自己決定理論とは、デシとライアン(Deci & Ryan 2000)により提唱されたものであり、「内発的な動機づけと外発的な動機づけは無関係でなく、自律性という次元上の連続体に位置づくもの」(中谷 2016)だとしている。自己決定理論では、動機づけが非動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけの3種類に分類され、さらに調整段階として、非調整、外的調整、取り入的調整、同一化的調整、統合的調整、内的調整の6段階に分けられる。同一化的調整以降は学習内容に何らかの価値や意義を認知することによって生じる動機づけであるとしており、本研究では同一化的調整以降のより内発的な動機づけを促すことが学習意欲の向上につながると考える。

また、自己決定理論は動機づけの維持方法として、自律性、有能感、関係性の3つの欲求を満たすことが重要であるとしている。自律性は「自分が主体的に行動し、自分で決定・統制したい欲求」、有能感とは「自分の能力を発揮し、達成できる感覚を得たい欲求」、関係性は「他者や集団との関係性を築き、つながりを感じたい欲求」とされている。

このため、本研究では、これら3つの欲求(自律性、有能感、関係性)を満たすような授業の工夫を、児童の授業への動機づけの向上へつながる授業の工夫ととらえ、学習意欲の向上を図る授業実践及び、

授業の工夫として構想し、提案することを目指す。

## 2-2-2. 分析の手続き

### 1) アンケート調査

本研究では、自己決定理論に基づいて設定した授業の工夫が、児童の動機づけの変容にどのように関与したのかを明らかにするため、分析を行った。授業内では複数の工夫を並行して実施していることから、各工夫の影響を相対的に捉えるため、重回帰分析を用いて検討した。

まず、授業前後における動機づけの変容を把握するため、「動機づけアンケート」を実施した。本アンケートでは、「あなたが国語を学習する理由として、4段階でもっともあてはまると思うものを答えてください」という設問に対し、1「まったくあてはまらない」から4「とてもあてはまる」までの4件法で回答を求めた。表3に、動機づけアンケートの項目を示す。アンケートの作成にあたっては、安藤史高・布施光代・小平英二（2008）を参考とし、内発的動機づけ、同一化的動機づけ、取り入的動機づけ、外発的動機づけについて、それぞれ5項目ずつ、計20項目を設定した。

次に、授業後に、どのような授業の工夫が児童の「やる気」に影響したかを把握するため、「授業の工夫アンケート」を実施した。本アンケートでは、「以下の項目は、国語の学習へのやる気にどれくらい影響しましたか」という設問に対し、1「やる気が減った」から5「やる気が増えた」までの5件法で回答を求めた。設問項目は表4に示し、全15項目からなる。

その具体的な分析方法として、授業後に調査した各動機づけ得点（4件法×5問、最大20点）から、授業前に調査した各動機づけ得点（4件法×5問、最大20点）を差し引いた値を、動機づけ変動得点（最大20点、最小-20点）とした。それぞれの動機づけ変動得点を目的変数とし、表4に示した授業の工夫アンケートによって得られた授業の工夫得点（最大5点）を説明変数として設定した。

これらの変数を用いて、Excelを使用し重回帰分析を行った。本研究は研究母数が少なく、国語科の授業における自己決定理論の有効性を検討する探究的・予備的研究であることから、効果の可能性を幅広く捉えるため、有意水準を10%に設定した。

表3 動機づけアンケート設問項目（授業前・授業後）

○国語の学習はわたしにとって大切なことだと思うから (同)	○他の子にかしこいと思われたいから(取)
○親や先生にしまわれないから(外)	○国語の学習をして、色んなことを知ることが おもしろいから(内)
○大人になってから、はじをかきたくないから(取)	○今している国語の学習は、しょうらい、役に 立つと思うから(同)
○新しいことを学ぶことがすきだから(内)	○ごほうびがもらえたり、ほめてもらえたりするから(外)
○今している国語の学習は、中学校に行くためのじゅん びになると思うから(同)	○先生や親に、よい子であると思ってほしいから(取)
○国語の学習をしなかったら、おこられるから(外)	○国語の学習がおもしろいから(内)
○国語の学習をしなかったら、あとでこまることがおこ ると思うから(取)	○生きていくのに、国語の学習をすることは ひつようだと思うから(同)
○今まで知らなかったことが分かるようになると、うれ しいから(内)	○「国語の学習をしなさい」と言われているから(外)
○「国語の学習をしよう」と自分できめていることだか ら(同)	○国語の学習をしなかったら、ふあんになるから(取)
○子どもが国語の学習をすることは社会のきまりだから (外)	○国語の学習が楽しいから(内)
	※(内)は内発的動機づけ、(同)は同一化的動機づけ (取)は取り入的動機づけ、(外)は外発的動機づけ

表4 授業の工夫アンケート設問項目

○プリントを使った授業（ノートを使わない授業）だったこと	○自分の好きなコースを選んで学習を進めているときに、今までの学習の成果（やまなし MAP やワークシート）がそばにあったこと
○やまなし探検隊になったこと	○自分の好きなコースを選んで学習を進めているときに、近くの人と交流できたこと
○やまなし MAP を使って、学習の見通しが持てたこと	○自分の好きなスライドやまとめ方を選んだり、考えたりして、自分なりにスライドにまとめたこと。
○やまなし MAP を使って、振り返りができたこと	○スライドにもともとテンプレートがあったこと
○授業ごとにめあてがあったこと	○自分なりにスライドをまとめているときに、近くの人や、同じコースの人と交流できたこと。
○自分の好きなコースを選ぶために、それぞれのコースを知る時間があったこと	○授業中に授業をしている先生と交流を持つことが出来たこと
○それぞれのコースを知る時間のときに、隣の人や近くの人と交流できたこと	○他に、やる気が増えたと感じたものがあつたら、記述してください（自由記述）
○それぞれのコースを知る時間のときに、全体でみんなの考えを確認できたこと	
○自分の好きなコースを選んで学習を進めたこと	

## 2) 児童の成果物

第1次から第3次まで使用してきた複数枚のワークシートと、第4次にて作成した Google スライドを用いて、前述のアンケート結果を踏まえ、児童個人の学びの過程を見取るための資料として使用した。

## 3. 結果

### 3-1. アンケートについて

今回実施したアンケートにおいて、授業前後ともに動機づけアンケートに回答した児童は 25 名であったため、分析に使用したアンケートの母数は 25 とした。また、授業後に実施した授業の工夫アンケートに回答した児童は 26 名であったため、分析に使用した母数は 26 であった。重回帰分析にあたっては、授業前の動機づけアンケートを実施できなかった児童のデータは除外した。

#### 3-2-1. 内発的動機づけ変動得点に影響したと示唆される授業の工夫

内発的動機づけ変動得点を目的変数とし、授業の工夫得点を説明変数として重回帰分析を行った。 $(R^2=.79)$ (有意  $F=.10$ )「やまなし MAP を使って振り返りができたこと」( $p=.037$ )「自分の好きなコースを選んで学習を進めているときに、今までの学習の成果（やまなし MAP やワークシート）がそばにあったこと」( $p=.053$ )「やまなし MAP を使って、学習の見通しが持てたこと」( $p=.072$ )において、10%水準で有意な差が認められた ( $p < .10$ )。

#### 3-2-2. その他動機づけ変動得点と授業の工夫得点

同一化的動機づけ変動得点、取り入れ的動機づけ変動得点、外発的動機づけ変動得点をそれぞれ目的変数とし、授業の工夫得点を説明変数として重回帰分析を行った。同一化的動機づけ( $R^2=.72$ )(有意  $F=.24$ )、取り入れ的動機づけ( $R^2=.69$ )(有意  $F=.32$ )、外発的動機づけ( $R^2=.60$ )(有意  $F=.58$ )と、有意水準 10%とした際に、それぞれの動機づけ得点に授業の工夫得点に影響したと示唆するに至らなかった。

#### 3-3. 動機づけ全体に影響したと示唆される授業の工夫

次に、重回帰分析とは別に、授業全体として児童にどのような工夫が支持されていたのかを把握するため、授業工夫得点の合計点を算出した。授業工夫得点の合計点(最大 130 点)を算出したところ、「自分の好きなコースを選んで学習を進めたこと」が 103 点で最大得点であった。「自分の好きなコースを選ぶために、それぞれのコースを知る時間があったこと」、「それぞれのコースを知る時間のときに、隣の

人や近くの人と交流できたこと」「それぞれのコースを知る時間のときに、全体でみんなの考えを確認できたこと」「自分なりにスライドをまとめているときに、近くの人や、同じコースの人と交流できたこと」の5項目が101点となった。

### 3-4. 内発的動機づけ得点が上昇した児童個人の学びの過程について

内発的動機づけ変動得点のみが上昇している児童がD児(文学ことばコース)、Z児(作者読みコース)、AE児(比べ読みコース)と三名確認された。

D児の学習感想として、「オノマトペや比喩のイメージをしっかりと考えることができた」「比喩が豊富にあるからよくかんがえられる」との記述が見られた。学びの過程としてワークシートやGoogleスライドからは、特にオノマトペや比喩について詳しく学習したい様子が見られ、第2次と比較し、コース選択をした第3次ではオノマトペや比喩に関する記述が増加した。第4次では、特に「かぷかぷ」というオノマトペについて、複数のイメージを膨らませ、学習を深めている様子が見られた。

Z児の学習感想として、「やまなし探検隊」になって学習ができたこと、スライドにまとめて、他の人にも自分の考えを知ってもらえたことが楽しかったし、嬉しかった。」という記述が見られた。学びの過程としてワークシートからは第3次以降「イーハトーヴの夢」から文章の引用を行い、宮沢賢治の人となりを考えながら、やまなしの中にどのように表れているかを考えている様子が見られた。Googleスライドからは、「やまなし」の記述と、第3次までに考えた宮沢賢治の人となりがどのように関わっているのか、さらに考察を進めている様子が見られ、「子どものかのにの為に頑張る父親のかに」と「多くの人間の為に頑張る宮沢賢治」を重ね合わせて「やまなし」を解釈している様子も見られた。

AE児の学習感想として、「やることをやまなしMAPに書いてあってわかりやすかった」「比べるのは楽しかった」などの記述が見られた。学びの過程としてワークシートやGoogleスライドからは、5月と12月の気温を想像しながら、「やまなし」の記述の変化に着目している様子が見られた。また、時間の変化にも着目しており、かのにの会話の内容から、弟のかにが成長していると解釈し、「だんだん(か)にたちは)知ることができた」という記述から、か)にたちの知識の発達が見られることも解釈している様子が見られた。

## 4. 考察

### 4-1. 自己決定理論を手掛かりにした授業の工夫に関する考察

#### 4-1-1. 内発的動機づけ変動得点に影響したと示唆される授業の工夫に関する考察

重回帰分析を行った結果、「やまなしMAPを使って振り返りができたこと」「自分の好きなコースを選んで学習を進めているときに、今までの学習の成果(やまなしMAPやワークシート)がそばにあったこと」「やまなしMAPを使って、学習の見通しが持てたこと」という3つの工夫が、他の工夫と比較したところ、内発的動機づけに影響しやすいと示唆された。

「やまなしMAPを使って振り返りができたこと」の示唆に関しては、自分の学びを振り返る行為により、自身の学びが可視化され、より自身の中での熟達を実感する手助けとしての有能感支援の効果があつたと考えられる。よって、児童の有能感や内発的動機づけを高めるために、振り返りの時間を取ることをはじめとして、全員が内容を書くことができるような授業や、書く際の支援などを行うことが有効であると考えられる。

「自分の好きなコースを選んで学習を進めているときに、今までの学習の成果(やまなしMAPやワークシート)がそばにあったこと」の示唆に関しては、コース別学習をする際に、自身で学びを進めていくにあたっての手立てが書かれているものや、自身の学びの実績がそばにあることによって、どのように自身が学んでいくべきかを見失いつらいことに加え、自身のこれまでの学びの熟達を実感する手助けとしての有能感支援の効果があつたと考えられる。よって、児童の有能感や内発的動機づけを高める

ために、児童が今まで学んできた成果物を活かせるような授業展開にすること、及び学んできた内容を活かす声掛けなどの支援を行うことが有効であると考えられる。

「やまなし MAP を使って、学習の見通しが持てたこと」の示唆に関しては、1次から4次までと全体の学習の見通しを持った後に、2次用のやまなし MAP、3次用のやまなし MAP をそれぞれの次の始めの時間に配付し、学習の見通しを紙面で可視化することで、何をするかを見失いづらいことやすることが分かることによる、学習活動に対してのできる感覚の手助けとしての有能感支援の効果があつたと考えられる。よって、児童の有能感や内発的動機づけを高めるために、学習の見通しやめあてを作成し、それを紙面などで可視化することで、どの段階でも、これまでの学びやこれからの学びを明確化することが重要であると考えられる。

#### 4-1-2. 動機づけ全体に影響したと示唆される授業の工夫に関する考察

重回帰分析では特定の動機づけへの影響は示唆されなかったものの、授業の工夫アンケートにおいて高得点であった工夫は、動機づけ全体を支える要素として機能していた可能性がある。

「自分の好きなコースを選んで学習を進めたこと」に関しては、「自分が主体的に行動し、自分で決定・統制したい欲求」である自律性の欲求を、好きなコースを選ぶという点で満たしたことによる、自律性支援の効果があつたと考えられる。よって、児童の自律性や動機づけを高めるために、児童自身が選択できる学習活動を設計することが重要であると考えられる。

「自分の好きなコースを選ぶために、それぞれのコースを知る時間があつたこと」に関しては、コース別学習の際に、学び方を確認しながら「やまなし」や「イーハトーヴの夢」を確認するための活動であつた。学び方を知り、学習の成果を作り上げながらコース別学習で読んでいく「やまなし」などに対して、児童のスムーズなコース別学習への導入を促し「できる」感覚を得やすくする、有能感支援の効果があつたと考えられる。よって、上記の自由に選択する機会を提供するにあたって、児童が学び方を確認できる方法を提供することや、スムーズな導入に向けての支援を図り、児童に「できる」感覚を持ってもらうことが重要であると考えられる。

「それぞれのコースを知る時間のときに、隣の人や近くの人と交流できたこと」「それぞれのコースを知る時間のときに、全体でみんなの考えを確認できたこと」「自分なりにスライドをまとめているときに、近くの人や、同じコースの人と交流できたこと」に関しては、「他者や集団との関係性を築き、つながりを感じたい欲求」である関係性の欲求を、授業内で児童間や児童－授業者間との交流を積極的に図ることによって満たしたことによる、関係性支援の効果があつたと考えられる。加えて、近くの児童と意見交流をすることによって、自身の意見と同じものを発見することや、意見がブラッシュアップされること、他の児童の意見を自分の意見として持てることで「できる」感覚への手助けとなる、有能感支援の効果があつたと考えられる。よって、交流の場の積極的な設定が重要であると考えられる。

#### 4-2. 国語科への示唆

国語科における研究例として、児童の資質や能力を如何に育むかを考えた研究や、主体的に学習に取り組む力を如何に育むかなどの非認知能力を育むことを考えた研究、作品や学習物などの価値を児童や生徒に如何に伝えるかといった実践研究は多くの関心を惹いていると執筆者は捉えている。しかし、本実践は、指導要領や教科書の指導事項に準拠しながら、児童の学習意欲や主体性を高める授業の工夫を実践するという観点からアプローチを行っている。そのため、国語の資質・能力や非認知能力の育成そのものに加え、児童が意欲をもって学習に向かうことを支える授業の在り方に着目している。児童の学習意欲を高める支援を通して国語科の学習を捉え直している点に、本研究の意義があると考えられる。

#### 4-3. 本研究の限界と課題

本研究は物語文教材、特に「やまなし」という文学性の高い物語におけるものであるため、他の物語文や説明文、論説文読解の授業、短歌、俳句、漢字学習といった他の学習活動に転用可能か不確実であ

る。よって、今後の調査を行っていく必要があると考えられる。

今回行った重回帰分析は研究母数が多くないこと、加えて有意水準を10%として扱っていることからあくまで可能性の示唆までにとどまっている。研究母数を増やしての研究や、これから先の研究にて明らかにしていく必要があると考えられる。

本研究では、自己決定理論に基づく複数の授業の工夫を同時に実施しているため、個々の工夫が児童の動機づけに与えた影響を厳密に切り分けることには限界がある。今後は、特定の支援に焦点を当てた実践を行い、影響をより詳細に検討する必要がある。

動機づけの変容は、本来長期的な学習経験の中で形成されるものであり、本研究のような短期間の実践によって見られた変化が持続的なものであるかについては明らかではない。今後は、単元を超えた継続的な実践や縦断的な調査を通して検討していく必要がある。

## 5. 結論

本研究は、自己決定理論を手掛かりとして、「自律性支援」「有能感支援」「関係性支援」の視点から、児童の学習意欲を高める授業づくりの工夫に着目し、国語科「やまなし」の授業実践を行った。その結果、学習の見通しをもたせる工夫、学びを自由に選択できる場の設定、児童同士の交流を意図的に取り入れることなどが、児童の動機づけ向上に関係する授業の工夫として示唆され、本研究の目的である授業の工夫の提案を行うことができた。

## 6. 引用・参考文献

中央教育審議会(2021)『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性をひき出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)』。文部科学省。2021年1月26日。  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/079/sonota/1412985_00002.htm)。

(閲覧2025年12月30日)

中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」。文部科学省。2016年12月21日。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm)。(閲覧2025年12月30日)

岡田涼「日本における自己調整学習とその関連領域における研究の動向と展望—学校教育に関する研究を中心に—」。教育心理学年報。2022.61.p.151-171

文部科学省国立教育政策研究所(2025)「文部科学省国立教育政策研究所「令和7年度 全国学力・学習状況調査 調査結果資料【全国版／小学校】」。2025年7月31日。

<https://www.nier.go.jp/25chousakekkahoukoku/factsheet/primary.html>。(閲覧2025年12月29日)

文部科学省国立教育政策研究所(2023)「小学校学習指導要領実施状況調査 児童質問紙集計結果」。2023年。[https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido\\_r04/](https://www.nier.go.jp/kaihatsu/shido_r04/)。(閲覧2025年12月29日)

Richard M. Ryan and Edward L. Deci 「Self-Determination Theory and the Facilitation of Intrinsic Motivation, Social Development, and Well-Being」 p.68-78 Copyright 2000 by the American Psychological Association

自己調整学習研究会監修, 岡田涼、中谷素之、伊藤崇達、塚野州一編者(2016)『自ら学び考える子どもを育てる教育の方法と技術』。北大路書房

安藤史高・布施光代・小平英二。「授業に対する動機づけが児童の積極的授業参加行動に及ぼす影響—自己決定理論に基づいて—」。教育心理学研究。2008.56.p.160-170

茅野政徳・櫛谷孝徳(2024)『小学校国語 読みのスイッチでつなぐ教材研究と授業づくり 物語文編』。東洋館出版社